

源流の四季

第6号(2002年7月)夏



Summer

発行所/多摩川源流研究所 〒409-0211 山梨県北都留郡小菅村4383
TEL 0428 (87) 7055 FAX 0428 (87) 7057
発行責任者/中村文明
協力/多摩川源流観察会
印刷/(株)サンニチ印刷
<http://www.tamagawagenryu.net>
E-mail:genryu@mx.cosmo.ne.jp



奥多摩の渓谷(撮影 中村文明)

Contents 目次

- 「多摩川源流絵図」小管版完成 2・3
- 県立ろう学校が「源流体験教室」 4
- 「大菩薩探訪の旅」「源流域第3回助役会議」... 5
- 丹波山の「お松引き」・「林相調査への意見」... 6・7
- イベント紹介・源流ファン倶楽部会員募集 8

「多摩川源流絵図」小菅版が完成

二年間の調査・研究をもとに、五月二日に「多摩川源流絵図」小菅版が完成しました。絵図には多摩川源流の小菅川、相模川の源流・鶴川の両方の流れが克明に描かれており、源流の里・小菅村の魅力や価値が絵図一杯に埋め込まれています。地元小菅村では、「今まで耳にしたことのあるが、小菅村の淵や滝、小字の由来は分からず手つかずのままだった。その全貌がつかめたことの意味は大きい。源流絵図小菅版は小菅村の貴重な財産といえる」との声が寄せられています。

源流の里・小菅村の魅力や価値が満載

立体感溢れる絵図

この絵図は、源流研究所の中

村文明所長が小菅の淵や滝、沢、尾根と小菅村にある八つの地区の小字の地名とその由来を、一昨年三月から村民の皆さんや小

菅村職員の協力を得ながら調査し作成したものです。この源流絵図小菅版は、三年前の「多摩川源流絵図」塩山・丹波山源に続くもので、これによって源流域の山梨県側の滝や淵等の調査が完了しました。

絵図は、塩山市・多摩川源流観察会の石川重人副会長が担当して、色鉛筆を使った手作りのもので、立体感溢れる色彩鮮やかな源流絵図に仕上げられています。表紙の妙見五段の滝や絵図に散りばめられている可愛い動物のイラストは、プロのイラストレーターであるしんじえりさんの力作です。



完成した「源流絵図」小菅版

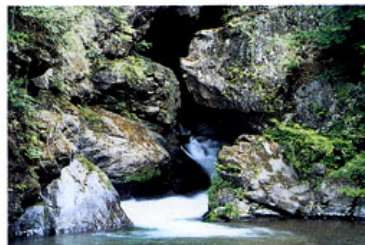
「源流絵図」小菅版の特徴の

滝・淵四十八カ所紹介

第一は、小菅村に所在する滝、淵、沢、尾根などの名称とその由来の調査・研究が大きく進展したことです。滝に関しては、白沢滝、奈良倉滝、ヤチグラの滝、棚倉の滝、白糸の滝、雄滝、妙見五段の滝、天狗の隠れ滝、観音滝（音無の滝）等が確認できました。淵に関しては、ツリガネ淵、テングウ淵、古橋場の淵、釜ッ淵、浅間淵、精進淵、蛇石淵、ヤチグラの滝、平山淵、ドウドコ淵、まがり淵、三天塚淵、センゴリ淵、清水淵、山の神淵、釜淵等、滝・淵四十八カ所を実踏調査することができました。

六十五の沢の名称確認

沢に関しては、大成沢、大森沢、



古代人の思いが名前に反映したヤチグラの滝

棚沢、桃ノ木沢、獅子ヶ沢、西沢、竹の貝、小沢、中黒沢、白糸沢、今倉沢、赤沢、矢下沢、日向沢、鳥小屋沢、山入沢、金場沢、紅葉沢、見晴沢、熊沢、熊切沢、井狩沢、山沢、クジラ沢、棚倉沢、カリバ沢、シオジクボ、カルメクボ、玉蝶沢、シンナシ沢、天狗棚沢、熊棚沢、棚沢、発沢、大白沢、ナカノサス、釜土沢、ハナオドリ、小米沢、井戸沢、秋切沢、大長作川、神楽沢、コヤケ沢、オキノカヤ等六十五カ所を確認しました。

小字、全百十四を調査

「源流絵図」小菅版の特徴の第二は、小菅村の八地区にある百十四の小字に関する地名とその由来に注目したことです。小菅村の東部（12）、白沢（9）、小永田（18）、中組（13）、田元（12）、川池（12）、橋立（18）、長作（20）の各地区を回り、長老や地区精通者に地名に関する由来を聞いて回りました。今回の調査で、村にあるすべての小字に関して調査・研究できたことは、これからの本格的な地名研究の基礎を築く大きな成果といえるでしょう。

源流絵図小菅版は小菅の貴重な財産

「源流絵図を採訪すると、秘められた郷土の歴史に出会える」との声が寄せられています。地元のお二人の方の声を紹介します。

「源流絵図」小菅版作成について



小菅村教育委員長
小泉 守氏

源流絵図の小菅版が手元に届いた。絵図の出来映えもさりながら、源流域の名称や小字の由来が丹念に調べられていて素晴らしい。地名の発生は地形、歴史、伝説等に由来するという。絵図でも、「沢」「淵」「久保」のように地形から名付けられたものや「大森」「ハイマゼ」「フリヤド」のように過去の生活様式の痕跡が土地に刻まれたものもある。これらの地名は、昨今、自治体の都合で付けられた平凡な地名と違って、その背景や過程に先人の知恵や世の移ろいを読みとることができ親しみがある。「萩原村ヨリ米穀ヲ小菅村ノ方ヘ返ルモノ此の時マデ持ち来タリ明見杜

ノ前ニ置キテ帰ル小菅ノ方ヨリ荷ヲ運ブ者峠ニ置キテ彼ノ送ル所ノ荷物ヲ持ち帰ル此の間数日ヲ経ルト難モ盗ミ去ル者ナシ」

この一文は今から180余年前の甲斐国志(三十六巻、山の部の大菩薩坂)に記述されているものであり、絵図では「荷渡し場」を指しているものと思われる。

米は、当時にあつて、貴重な穀類であり、それが数日おいても無くなかなかつたことは現代人にとつて驚きであり、このことからして、いしえの人々の倫理感を垣間見ることが出来る。源流絵図を採訪していくと、秘められた郷土の歴史に出会い、埋もれた文化遺産を発見することができる。



財団法人
小菅村文化委員会
田中 祀氏

多摩川源流研究所事業の一つとして作成された源流絵図は、此の地を尋ねる人、旅行者ばかり

か、村民にも大変有難いものである。村人さえもこの絵図の全てを知っている人はないと思う。

廣瀬村長 中村所長 佐藤主幹を中心として、役場及関係者スタッフの協力努力に対し厚く感謝する次第である。この絵図

地名は重要な無形文化財

今回の小菅村における地名の調査に取り組んで、地名の生まれてきた背景、地名の変遷、地元の方々の地名への思いなどに直接触れる機会を得ました。身近な地名の一つ一つに人間の生活や暮らし、文化や歴史が織り込まれており、地名は無形文化財として重要な価値があるように思えてなりません。また、古代人の自然に対する畏敬の念や洞察力の深さには頭が下がります。ここに幾つかの小字の由来を紹介します。

東部地区・余沢に「大成」と呼ばれる地名がある。大成は昔富士講の通り道にあたり賑わいを見せていた。大寺、小寺、比丘尼寺と小さな集落に三つの寺が建ち並んだ。ここは山間の緩やかな傾斜地にあたることから、ナルい傾斜の土地という意味で大成と名付けられたのであろう。

牛が決めた村との境界

長作地区に「牛飼」という面白い地名がある。ここで地元の人が牛でも飼っていたのである

より流れ出た水は、清く美しく、多くの生命や草木を育て、古代より今日送られて来ている。

将来に向けて源流研究所の設置は、先賢性の最たるものである。この絵図の各沢から湧き出す泉は、天よりの恵みであり、神に感謝

会」が正解であつたと思われる。

地形の特徴を名に生かす

中組地区・山沢に「タノモクリ」とよばれる小高い土地がある。地元の人に聞いてもその意味が不明であった場所である。この調査が終わりに近づいた頃、村の長老に聞きに行った。長老も「タノモクリ」の意味を図りかねていたが、長老はその場所を「タナモックリ」と呼んでいた。この大地は三段の棚から成り立っており、上の二段に集落が形成されている。近くで見ると読みとれない地形の特徴をどこか高い場所から判断して、段々と続く高地の一番上に盛り上がったところがある様子を「タナモックリ」と呼んだのであろう。その「タナモックリ」が、いつの間にか「タノモクリ」に変化したのであろう。

県立ろう学校が「源流体験教室」

大自然の豊かさと力強さに感動

自己責任の大切さ

県立ろう学校は、五月十六日、中学部宿泊体験学習として、源流研究所の協力で「源流体験教室」を実施しました。当日参加された竹内陽子先生は「自己責任のもと自分で考えながら安全



源流体験する生徒たち（5月16日）

に気をつける体験は、日常の中ではあまり意識されませんが今回の経験でそれについて意識するよい機会となりました。また、大自然の美しさと力強さを肌で感じる事が出来ました。」と感動した源流体験の感想を寄せました。

「源流体験教室」に参加したのは県立ろう学校から、中学部の生徒四名と先生六名の合計十名で、源流研究所では中村所長、佐藤事務局長、井村主任研究員が対応しました。源流研究所での開校式では、佐藤事務局長が小菅村の人口や特産物等を分かり易く紹介、中村所長が「源流体験教室」の目的とねらいを話し、昼食を食べて源流に出かけました。

現地では、源流に入るに当たって、中村所長が、「源流には道はありません。源流の流れをよく観察し、自分で判断して自

分の責任で歩きます。自分の安全は自分で守ってください。」とアドバイスし、赤沢出合い下淵、たわむれ淵、釜淵のぞき淵と源流体験コースを回りました。

生徒の日野原優くんは「とても楽しかった。川の流れが速

くきびしい登りだけども面白かった。またいつか登りたい。」と感想を述べ、また大村哲雄先生は「自分の目で見、耳で聞き、考えて行動する体験の積み重ねはとても大切だと思う。学校で得た知識を自然の中で活用してみよう。使えないものもあることを知り自然の中から学び得る、そういう意味でこの源流体験はとても意義のある活動であると思う。」と源流体験の意義を語ってくれました。

稲城・調布・世田谷・狛江・日野・道志 注目集める「源流体験コース」を視察

神秘的な魅力に満ちた源流との出会いは、子供達や親たちの心に得がたい感動と新鮮な喜びを刻んでいます。昨年、世田谷区の瀬田小、川崎の水辺の栗校、昭島エコキッズ、昭島市成臨小の「源流体験教室」が大変好評で波紋を広げ、今年度「源流体験コース」視察が相次いでいます。

稲城市教育委員会と青少年委員の皆さんが五月十一日、さらに調布市環境保全課の皆さんが五月十五日に、世田谷区環境総合対策室が二十八日に、狛江市

環境改善課が六月三日にそれぞれ「源流体験コース」の視察に來られました。また四月には、山梨県道志村と日野市ふるさと博物館から視察に見えられました。当日は、中村所長、佐藤事務局長、井村主任研究員が源流体験コースを案内しました。

「源流体験コース」の視察を終えた稲城市の青少年委員の渡辺秀貴さんは「水の流れや岩の様子、木肌や葉、苔の生息の様子などを体感でき、気持ち解

放できた。実にさわやかな気分です。子供達には、自然にどっぷりつからせて、気持ちを解き放つ喜びを体感させたい。」と感想を寄せ、世田谷区の冨永宏久環境総合対策室長は「久しぶりに自然の良さを体験、感激の一言です。多くの人に是非体験してもらいたいものです。」と述べていました。

また、世田谷区の真野源吾区長室長は「本当の自然の中で綺麗な水と空気に触れて元気が出てきました。もっと多くの人に知ってもらおうことが大切だと思います。子供達には、なにげなく使っている水の原点がここにあることを自分の目で見て知るこの大切さを伝えたい。」と語っていました。



「源流体験コース」を視察する稲城市の青少年委員（5月11日）

好評「源流・大菩薩探訪の旅」

絶景の富士山に歓声あがる

源流研究所は、6月8・9日に「源流・大菩薩探訪の旅」を実施しました。このイベントには流域各地から31名が参加し、素晴らしい晴れ上がった大菩薩の旅を楽しみました。



快晴に笑顔の「大菩薩探訪」の参加者（6月9日）

8日の午前10時に奥多摩駅に集合した参加者は、小菅村の長作地区に向かい、国の重要文化財である長作観音堂や巨木が林

立する御鷹神社を見学、かごや旅館で昼食を済ませた後、小菅川源流の雄滝や白糸の滝を散策しました。

9日は、朝7時に旅館を出発した参加者は、日向沢登山口から大菩薩に向けてのぼりはじめ、10時すぎに大菩薩峠に着きました。当日は、梅雨の合間にしは珍しい快晴に恵まれたため、稜線から富士山や南アルプス、源流の山々を一望できたため、参加者は大喜びでした。

天狗の頭で昼食を済ませた参加者は、記念写真を取り終えた後、水源の森をゆつくりと観察しながら下山、小菅の湯で旅の疲れをとり帰路に就きました。

この取り組みには、源流研究所の佐藤事務局長をはじめ小菅村役場のスタッフや都薬用植物園職員、吉沢さん、日本野鳥の会の桜岡さんなどがそれぞれ参加しました。

参加者の一人は「小菅村の人たちの暖かさが村の隅々まで溢れています。食事は量が多くて

ビックリ、とても美味しかった。日本にもこんな暖かいところがあり、気持ちよかったです。」と感想をよせてきました。

タイアップ事業が始動

源流研究所は、読売日本テレビ文化センターや多摩らいふ倶楽部とタイアップして、源流・流域交流事業を今年度計画しました。「多摩川源流を歩く」シリーズは、読売日本テレビ文化センターと協力し、4月に「源流研究所と小菅村を訪ねて」、5月に「歴

多摩川源流協議会七月設立へ

源流域第三回助役会議開催

源流域の塩山市、奥多摩町、丹波山村、小菅村の関係市町村の第三回助役会議が、四月十八日、奥多摩町役場で開催されました。助役会議には、塩山市の

史探訪・黒川鶏冠山を訪ねて、6月に「多摩川の最初の一滴を求めて」、7月に「奥多摩・巨樹と鍾乳洞を巡る」、8月に「知られざる三条の谷を歩く」、9月に「源流・大菩薩探訪の旅」をそれぞれ計画しました。

4月には、23名が、5月には雨のため参加者が減りましたが13名がそれぞれ参加し、源流の自然や郷土食を楽しみました。

多摩らいふ倶楽部は「里山の休暇 小菅村のんびりいこう」をテーマに6月4日、参加者23名が小菅を訪ね、山菜採りと郷土食を楽しみました。参加者は「取れたての山ウドの天ぷらは最高。自分で焼くヤマメの味は格別でした。小菅のもてなしは心がこもっていました。」と感想を漏らしていました。



原始村で「手打ちそば」を楽しむ「多摩らいふ倶楽部」（6月4日）

日原健次助役、奥多摩町の河村文夫助役、丹波山村の橋詰武総務課長（助役代理）、小菅村の古家成勝助役と各市町村の担当者及び源流研究所から中村文明所長が出席しました。

第三回助役会議では、はじめにこれまでの経過が報告されこ

れを全体で確認した後、多摩川源流協議会の設立に向けた協議が行われました。源流協議会の趣旨や目的を定めた規約案について検討が行われ、名称、目的、構成、事業、役員、会議、助役会及び幹事会（事務局）、部会、運営費、監査、事務局、規約の改正、雑則、附則などについて議論が交わされ試案が練り上げられていきました。

助役会議では、七月三十日に設立総会を小菅村で開催することを確認し、総会で規約や役員や事業方針等を決定し、源流域の市町村の協調体制を一層確立しながら共同の取り組みを強化していくことを確認しました。

丹波山村のお松引き



丹波山村 伊藤 巖前助役

平和への祈りを捧げる

丹波山村には、毎年一月七日に「お松引き」という珍しい正月の行事があります。その由来を知る文献は、殆どありませんが、江戸中期に京都から伝えられたとも言われています。



十二支の「エト」を飾った「お松」(1月7日)

山里に住む村人が、平和への祈りを捧げる正月の行事として、十二月三十日、神棚に松飾りや、お供餅をあげ、村中の家々の軒先に、長さ二、三米くらいの門松と笹竹二本ずつが飾られ「シメ飾り」を張って正月を迎えます。伝えられるところによると、正月の神様が天から降臨して、この門松に宿り、一月十四日に行われるお松焼きで再び神様を昇天させるのだと信じて行われ、お松引きを盛大にするためにも昔から大きな門松が立てられてきたようです。

大きな修羅にヤグラ組む

一月七日の朝「七草ガユ」を門松に供えたあと、各家庭ごとに村の入口の熊野神社前に引き集め、文化財保存会の世話役たちによって、大きな修羅(双又に分かれている一本の木で古来からの運搬具)の上にヤグラを組み、門松を高さ三米、幅三米くらいの船型に積み上げ、その上に円型に笹竹を立て、その中



村人の手で「お松引き」(1月7日)

に、五、六人くらいが乗れる「ダシ」が造られます。正面には二本の国旗とシメ飾りの下に、その年にちなんだ十二支の顔を型どった「エト」が飾られ、お松様が出来上がります。午後二時頃から夕刻までかかって、長さ五十米の綱引用ロープ二本で丹波宿四百米の間を村はずれ道祖神まで引くのが「お松引き」の行事です。

威勢のよい「木遣唄」

このお松引きは、京都で行われているほかは、他に類がないことから珍しい行事とされ、とくに変わっているのは、威勢のよい「木遣唄」で引くのが特徴です。

木遣唄というのは、「木曳き唄」と同じで大木などを大勢で引く張るときに、かけ声をかけて、力を合わせるために唄われてきた様です。

丹波山は昔から林業の盛んな地域でありましたから、山から伐り出した木材を丹波川を使って東京方面に流し運んだ時に唄われたのが、このお松引きにも唄われるようになったとも言われています。

ヤルワイナー

立てこんだ、立てこんだ

三階松を立て飾り

一の枝には米がなり

二の枝には金がなり

三の枝には餅がなる

ますます繁昌と暮したいぞえ

エンヤラヤー

というような唄をはじめ、恵比寿様、弁慶、ツバクロ(ツバメ)、ウグイスなどの目出度い唄が次々に唄われます。

厄を払い祝いをよぶ

その度に木遣唄にうながされたいお松様は、重い腰をあげ暫く進んでまた所々で休み、厄落し、病気全快祝い、結婚祝い、出産祝いなどによる沢山の金品

が供えられたのを、世話役たちが披露(お松様の竹笹にも半紙に記載して掲示)したり、松の上から「みかん」がまかれたり、お神酒を振る舞ったり、祭ばやし、太鼓に合わせて二本の綱の間で踊りが出たり、この日は静かな山里に木遣唄や、かけ声がこだまして、住民の多くが参加し、帰省客や近郷近からの見物客も加わって賑わいます。

この日、午前中に奥秋、高尾、押垣外、保之瀬の各部落でも小規模なお松引きが小さな修羅に乗せられて、それぞれ行われます。

村人たちは、この行事が済むと今年の正月も終わり、これから新しい年が始まるのだという気分を、しみじみと感じながら行う正月行事の一つです。

お松引き木遣唄

(恵比寿様)

やるわいな

やるわいな

やるわいな

(以下同じ)

恵比寿様という人は

一に俵を踏んまいて

二つにニッコリ 笑うて
三に五 手に受けて
四つ 世の中良いように
五つ 泉の湧くように
六つ 無病 息災で
七つ 何事 ないように
八つ 屋敷を買い広げ

九つ 穀倉を打ち建てて
十でとうとう 納まうたぞえ
エンヤラヤーア
(弁慶)
やるわいな
弁慶が 弁慶が

五条の橋の真ん中で
柄も四尺 刃も四尺
合せて 八尺の鎌刀を
エンヤラヤーアと振るときは
如何なる 黒金山でも
たまるまいぞえ
エンヤラヤーア

源流・水源の森「林相調査」に関連して② —ブナ林礼賛の危うさ—



堀越 弘司氏

（ブナ林が水を生むことはない）

誌面の都合で、詳細な説明はできないが、ブナ（林）が土を作ったり、水を生むことはないことについて、簡単な説明をしておこう。

ブナ林が成立している場所を注意深く観察して欲しい。そこは、傾斜が比較的なだからで、土が深い場所であることが判る

はすである。逆に、傾斜が急であったり岩盤地帯など、土が浅い場所、言い換えれば、樹木の生育環境の劣悪な場所では、ツガやヒノキなどの針葉樹が優占している。このように、地形、おもに土の深さにより分布する森林は異なってくる（標高や緯度の高い場所は、違った要素が入る）。樹木の落葉は、やがて土に有機質として混ざり、孔隙の多い森林土壌の醸成に貢献するが、鉱物質の「土」そのものを作り出すものではない。

山地の土の深さは、地形や地質により大きく左右され、その土の深さにより森林分布も左右される。広葉樹、特にブナが土

を作り出すのではなく、土が深い場所にブナなどの広葉樹林が成立するのである。土の深さとその上に成立する森林との間には、相関関係はあるが、「広葉樹林だから土が深い」であるとか、「針葉樹林だから土が浅い」といった因果関係はない。

広葉樹林、特にブナ林の四季の移ろいは、変化に富んでいる。人が造った、四季の変化の乏しい針葉樹だけの人工林と違い、誰にでも好かれる所以である。しかし、その問題と水源地の森林としての良否とは、まったく別個なものであることに気づいて欲しい。

「ブナ（林）が水を生む」とか、「ブナ林だから水源かん養機能が高い」といった考えから導き出される積極的な活動とは、やはり、ブナを「植える」ことである。よく新聞報道される、水源の森づくりと称した「市民ボランティアによるブナ植樹」などのように、すでに天然更新されている広葉樹の幼樹を伐採し、ブナの苗木を植栽するといった方法などである。ヤマハンノキの幼樹を伐採してブナを植えた例も報道されている。

ブナやミズナラを主とする広葉樹林や、ツガやヒノキなどを主とする針葉樹林などの天然林は、自然の推移（遷移）により辿り着いたその立地（気候、地質、地形）での究極の姿（極相）である。今後、これらの森林では、その立地に変動がない限り、構成種に変動がないまま、世代交代が繰り返されていくものである。すなわち、天

然林は、人為を加えなくとも、十分に存続していくものである。仮に、地球規模の気候変動により構成種の変動があったとしても、常に、新たな極相に向かっていくものであると考える。人為を全く加えたことのない原生林の存在が、そのことを証明している。気候の変動によりブナ林の存続が困難となるのであれば、ブナの衰退は仕方のないものである。敢えて、そこにブナ林の更新を図ることは、陸地化しつつある湿原に、湿原の構成種を植えることと同じく、自然の流れを無視した行為になりはしないか。天然林を舞台として、植栽、さらには苗木の保護育成のための下刈など、極めて人工的な作業を繰り返して実施することが、反自然的な行為と思うのは、私だけであろうか。

私たちの水道水源林を高く評価していただくことは、永くこの森に関与してきた者にとってもありがたいことである。しかし、その際に、「ブナ林こそが水源の森にふさわしい」というような、一面的な見方だけで森林を捉えないで欲しい。

多摩川源流研究所は、やはり、研究機関であって欲しい。

（水源管理事務所勤務）

イベントの紹介・源流ファン倶楽部会員募集!

小菅村と源流研究所では、源流と流域との交流を積極的に推進しようと「水と森と食の祭典」「源流・大菩薩探訪の旅」「源流・水干探訪の旅」をこの秋に企画しました。また、流域の市民の皆さんにより「源流に親しんでもらおう」と多摩川源流ファン倶楽部」を設立し、その会員を募集しています。イベントの定員は、「大菩薩探訪」が三十名、「水干探訪」が五十名です。お申し込み、お問い合わせは小菅村・源流研究所まで。

「水と森と食の祭典」

多摩川源流域の水源地は日本の水源地に成長しています。

これは、東京都水道局の優れた技術と管理はもとより、地元住民の方々の水年に渡る水源地への理解と協力に他なりません。水や森を守る大切さと源流域の産業や文化を広くアピールする事を目的に「水と森と食の祭典」を開催します。

◎日時／十月十九・二十日

◎会場／小菅村

◎内容／シンポジウム・交流会

◎対象／川、水、森や食に関心のある方

「源流・大菩薩探訪の旅」

この春の大菩薩探訪の旅は、梅雨時には珍しい快晴に恵まれ、富士山をはじめ南アルプス、源流の山々などを楽しむことが出来ました。紅葉の源流と郷土食と温泉、合わせて地元の人情に触れる旅に是非お出かけください。

◎日時／十月二十六・二十七日

◎集合場所／JR奥多摩駅

◎費用／一万三千元

◎対象／山歩きに自信のある方



清涼感あふれる小菅川源流

「源流・水干探訪の旅」

今、源流へ関心が高まり、熱い視線が送られています。多摩川は昔から流域の人々に親しまれてきましたが、その多摩川の源は、都の水源地養林に覆われ、豊かな自然が広がっています。あなたの目でその水源地と最初の一滴を確かめてみませんか。

◎日時／十月二三日

◎集合場所／JR奥多摩駅

◎費用／一万三千元

◎対象／山歩きに自信のある方

多摩川源流ファン倶楽部・会員募集

週末を使って、気楽に出かけられる近場で、大自然の地はないものか。緑の中をのんびり散策したり、川の中をせせらぎの音に耳を傾け、何にもしない贅沢な時間を過ごしたい、できたら温泉も楽しみたいけど……、こんな風に思ったことはありませんか。そんな皆さんに、ぜひ多摩川源流の市町村について知ってもらいたい、来て見て体験してもらいたい、そして好きになってもらいたい。

こんな思いを込めて、多摩川源流研究所では、この度、多摩川源流ファン倶楽部(仮称)を設立しました。この五月から会員を募集し始めました。このころ、「源流体験教室」や「源流・水干探訪の旅」、「源流・大菩薩探訪の旅」への参加者など六十四



「水干」に歓声をあげる参加者

名が入会されました。

源流に関心があり、何かお手伝いしたいと思っておられる方なら誰でも入会できます。お友達を誘って是非源流ファン倶楽部にご入会ください。

会員の心得と会員の特典をご紹介します。

席上、こうした源流の仲間の輪を広げていくことを目的に「全国源流ネットワーク」が設立されました。その事務局は多摩川源流研究所に置かれます。詳細は次号。

全国源流ネットワーク設立

源流を愛する人、源流の仲間たちが集まって、源流の素晴らしさやそこで繰り広げられる生命の物語を語り合い、水や森を守るこの大切さと源流と下流の役割を確かめ合うことを目的に、第三回全国源流シンポジウムが、五月二十五日奈良県上村で開催されました。源流シンポジウムには、大分県大野川、島根県江の川、三重県名張川、山梨県多摩川源流、埼玉県荒川から仲間が集い、地元川上村と交流を深めました。

◎私は、多摩川源流と長く楽しくつきあいます。

◎私は、多摩川源流の自然を守り大切にします。

◎私は、年会費として千円(通信費その他として)払います。

◎「源流の四季」の無料購読

◎イベント情報の紹介

◎小菅の湯温泉料金の割引

◎市民農園の紹介など



第3回全国源流シンポジウム(5月25日・奈良県上村)